

# Wikiつまみぐい

最終回

第12回 Wikiつまみぐいコーヒーラウンジへどうぞ

塚本牧生 (TSUKAMOTO Makio)  
しばむらしのぶ (SHIBAMURA Shinobu)  
yomoyomo (YOMOYOMO)

## WikiつまみぐいとWikiばなの1年

TEXT = 塚本牧生 (TSUKAMOTO Makio)

### ついに！Wikiつまみぐいフィナーレ

こんにちは、塚本牧生です。Wikiのさまざまなトピックを取り上げてきた「Wikiつまみぐい」ですが、今回が最終回となります。「つまみぐい」のタイトルに倣うと、コーヒーラウンジに席を移して食後の歓談を、というところですね。

デザートというわけではないですが、今回の内容はこの連載にまつわる話ということで、「Wikiばな」関連の話題が中心になります。

まずは筆者から、Wikiばなの2005年後半から

2006年前半にかけての活動のご紹介。次にこの連載を取り仕切ってきたshinoさんから、事例としてこの連載のために活用されてきたスタッフ用qwikWebサイトをご紹介します。それから、連載「yomoyomoのWikiばなし」を担当していただいたyomoyomoさんからは、スペシャル・コラム「Wikiの未来とWikiの本質」。

それでは、最後までお付き合いのほどを、よろしくお祈いします。

### Wikiばな活動レポート

Wikiばなでは、昨年2005年8月号から本連載を持たせていただき、今回でちょうど1年になります。その間に連載以外にもWikiばなとしていくつかの活動がありました。それぞれをダイジェストでご紹介しましょう。

#### 本誌連載：Wikiつまみぐい

本連載は今回を含め全12回になります。第1回でshinoさんが書かれているように「テーマは毎回異なるアラカルト方式で、つい、つまみぐいしたくなってしまうような美味しいものをチョイス」という方針で進めてきました。

まず第1回は連載の皮切りに、Wikiばなと連載の紹介。続いてWikiアプリケーションそのものや、JavaScriptによるユーザインターフェー

スやPDF出力などの実装技術関連、WikiによるWebマガジン『るびま』発行やLifeHack、ウィキペディア、WikiSym 2005レポートなどのWikiの活用方法やコミュニティに関する話題。さらに、MediaWiki、qwikWebといった「大きな」Wikiアプリケーションにフォーカスして、その環境構築などをテーマとしてきました。

また、yomoyomoさんにコラム「yomoyomoのWikiばなし」の連載をお願いしました。こちらは、その時々で「旬」の話題を取り上げながら、そこからWiki文化を鮮やかに浮かび上がらせる内容にしてくださったと思っています。

これまでの各回のテーマを、表1にリストアップします。興味をお持ちいただける回がありましたら、バックナンバーのあるうちにぜひお

表1 Wikiつまみぐいテーマ一覧

回数	月号	連載内容(執筆者:敬称略)	yomoyomoのWikiばなし
1	2005年 8月号	Wikiばなの紹介 / Wikiの十年史 (しばむらしのぶ, 塚本牧生)	企業への本格的なWikiの導入
2	2005年 9月号	Wikiのしくみをご紹介します! (塚本牧生)	TiddlyWiki旋風
3	2005年10月号	Wikiで作ろうWeb雑誌! 『るびま』作りの舞台裏 (かずひこ)	Wikimania 2005が開催される
4	2005年11月号	wemaの魅力に迫る~ JavaScriptとWikiの融合 (ふしはらかん)	「小人さん」あつてのWiki
5	2005年12月号	WikiとWebサービスAPI (塚本牧生)	WikiとWYSIWYG編集
6	2006年 1月号	WikiでLifeHack! / WikiSym 2005レポート (増井俊之, 江渡浩一郎, 新井俊一)	ハイブリッドWiki
7	2006年 2月号	ウィキペディア日本語版の世界 [前編] (Gleam)	2005年はWikiの年だったのか?
8	2006年 3月号	ウィキペディア日本語版の世界 [後編] (Gleam, Suisui)	WikiSym 2006の開催
9	2006年 4月号	MediaWikiインストール&設定解説 (しばむらしのぶ)	Wikiが成功するための条件とは?
10	2006年 5月号	qwikWeb徹底解説 (えとこういちろう, 協力: えとー)	Wikiの書籍
11	2006年 6月号	WikiとPDF (竹添直樹)	Wiki的オープンソース情報共有サイトSWIK
12	2006年 7月号	WikiつまみぐいとWikiばなの1年 / qwikWeb上のWikiつまみぐい (塚本牧生, しばむらしのぶ)	Wikiの未来とWikiの本質

読みいただけると嬉しく思います。

## WikiばなとWiki小話

Wikiばなと言えば、もともとWikiが気になる人たちが集まっておしゃべりするWikiばなタイムです。Wikiばな、そしてWiki小話といった活動もしてきました。

Wikiばなソコダネット (<http://wikibana.socoda.net/>) に資料や参加者の感想へのリンクなどがまとめられていますが、ここでも簡単にご紹介しておきます。

### 第五回Wikiばな

いつも「やろうよ」と声をかける人たちがWikiつまみぐいに注力してしまっちゃってちょっと開催ペースは落ちましたが、2005年10月には第五回Wikiばなを開きました。

Wikiばなではおしゃべりがスムーズに流れ出すようにお題とポジションペーパーというしくみを取り入れています。このときのお題は「Wiki関係で気になる3つのキーワード」。参加者から思い思いのWiki関連キーワードが出てお

もしろい会になりました。

### Wiki小話Vol.1

また、Wikiばな開催のペースが落ちるけど、その間オフラインでのイベントがないのは寂しいと思い、筆者と山下たつをさんでWiki小話というイベントを始めました。Vol.1は「最近のWikiの雑多な話題」。たつをさんが司会 / プレゼンテーションをし、「客席」からもわいわいとツッコミの入る会になりました。

### Wiki小話Vol.2

テーマはWikiでサイト構築をしている人には気になる「Wikiと著作権」。『Web Site Expert #03 ~ #05』(技術評論社)にWebと著作権に関する記事を寄せられていた田口「サイモン」聡さんに、プレゼンテーションをお願いしました。どのようなトラブルに気をつけるべきか、など具体的な、有用な話を伺うことができました。

### Wiki小話Vol.3

テーマは2005年10月に海外で開かれた

表2 Wikiばなイベント活動一覧

開催月	イベント	内容(プレゼンター/コーディネータ)
2005年 9月 21日	Wiki小話Vol.1	「最近のWikiの雑多な話題」(たつをさん)
2005年 10月 15日	第五回Wikiばな	「Wikiの気になる3つのキーワード」
2005年 11月 7日	Wiki小話Vol.2	「Wikiと著作権」(Simonさん)
2005年 11月 21日	Wiki小話Vol.3	「WikiSymレポート」(江渡さん)
2005年 12月 22日	Wiki小話Vol.4	「Wikiとセキュリティ」(wakatonoさん, 国分さん)
2006年 1月 23日	Wiki小話Vol.5	「Wikiプレゼン会」(たつをさん)
2006年 2月 9日	デブサミ	オフィシャルコミュニティ, ショートスピーチ (shinoさん)
2006年 2月 20日	Wiki小話Vol.6	「このWikiがスゴイ!」(江渡さん)
2006年 3月 18日	OSC2006	展示「Wiki立ち話」, セミナー「Wiki記法のエトセトラ」(筆者)

WikiSym 2005についてのレポート。実際に参加/発表をされた江渡さんにプレゼンテーションをお願いし、2006年1月号に掲載されたレポートと相補する内容のお話を伺いました。

#### Wiki小話Vol.4

テーマはWiki開発者にとって気がかりな「Wikiとセキュリティ」。wakatonoさんに「Wiki処理系を作る前に～歴史に学ぼう - Changelogは教訓の宝庫?」, 国分さんに「Webアプリケーション監査～攻撃者の観点から」という発表をしていただきました。Vol.2ではサイト運営者にとって頭の痛い話でしたが、こちらは開発者である筆者自身にとって肝の冷える話になりました。

#### Wiki小話Vol.5

テーマは「Wikiプレゼン会」。たつをさんの司会/進行で参加者全員がライトニングトーク。ソーシャルネットバー(dotBAR)を会場に、初のお酒が入りながらの小話でした。

#### Wiki小話Vol.6

テーマは「他薦Wiki博覧会『このWikiがスゴイ!』」。Vol.3で江渡さんが「日本のWikiも世

界に知られていないけど実はスゴイ」と話されたのをきっかけに企画され、江渡さんの進行で発表4件、ライトニングトーク7件というちょっと変わった形式になりました。

#### デブサミ2006とOSC2006への参加

これまで「イベントを開くときの連絡網」的だったWikiばなですが、2006年2月にはデブサミ2006にオフィシャルコミュニティとして名を連ねさせてもらいました。また、3月にはOSC2006にコミュニティとして参加しました。

OSC2006では、まず「Wiki立ち話」と称して展示ブースへ出展、本連載や連載開始直前に『Web Site Expert』に寄稿した全記事を読める「『Wikiつまみぐい』立ち読みコーナー」も設けました。また、私も「Wiki記法のエトセトラ」というセミナーをさせていただきました。

Wikiばなのようなイベントが開かれる他に、こうしたコミュニティ的な性格の団体、活動が求められるようになってきたことも、Wikiがかなり認知されてきた1つの証左かと思います。

テーマおよび開催時期について表2にまとめます。

## これからの「Wikiばな」

近々の予定をご紹介します。この記事の執筆時点(5月中ごろ)ではまだ「予定」というものが多いのですが、いくつかは誌面が皆さまのお手元に届くころには資料や開催が発表されていることと思います。

まず5月末のLinux Conference 2006へは江渡さんがWikiについてのサーベイ論文を投稿されています。Wikiばなの直接の活動というわけではありませんが、Wiki小話Vol.6などをベースにしたものになるようです。本誌発売時点では、すで

にLinux Conferenceでの発表も済み、論文がWeb上で公開されているものと思います。

また、7月には第六回Wikiばなの開催が予定されています。これももう参加者募集などのアナウンスが出ているかもしれませんね。今回はLifeHackなどの活用術的なテーマを考えていると聞いています。それから、Wiki小話も筆者がいくつかやりたいテーマを抱えながら仕事の都合などで開けなくなっているのですが、もしかしたら誰かに運営を引き継いでもらって開催されるかも

しません。実は、それをすごく楽しみにしています。

それから?...それから、どうなるでしょう。まだいくつかWikiばなの周りで動いている企画があります。こうした機会でも、また皆さまにお会いできることと期待しておりますが、皆さまも楽しみにお待ちいただければ...

おっと、まだ早いですね。まずは、shinoさんにタッチ。引き続き、この連載を支えてくれたqwikWebの活用術をお楽しみください。

## qwikWeb上のWikiつまみぐい Wikiつまみぐい運用の舞台裏

<http://qwik.jp/wikibana-gihyo/>

TEXT = しばむらしのぶ (SHIBAMURA Shinobu)

### はじめに

こんにちは。Wikiばなソコダネット (<http://wikibana.socoda.net>) の設置者、しばむらしのぶです。塚本さんが先にご紹介くださったように、昨年の2005年8月号から連載をはじめさせてもらった本連載「Wikiつまみぐい」は、「Wikiばな」に参加して下さったり関係して下さった方々の中から、Wikiに関する旬な話題

を持ち回りで記事にしてもらったものでした。

最終回となる今回は、qwikWeb (<http://qwik.jp/>) を利用した、複数執筆者と編集者による連載のまとめ方をご紹介します。この記事を読まれた方がコラボレーションなどの作業をするときに「このケースではWikiを使ってみようかな」と思ってくだされれば幸いです。

### 連載の進行方法

「Wikiつまみぐい」連載の進行形式を図1に示します。大きく分けて、オフラインでのミーティングや編集者のレイアウト作業がありますが、原稿の更新や校正、執筆者とのやりとりなどの作業は、qwikWeb上で行われました。

#### 見通し重要

最初、2005年3月26日に、全体の進行についてのミーティングが、編集長およびWikiばなサイドから募ったコアメンバー(塚本牧生氏、筆者(しばむらし)、そして、執筆はされませんが<http://diary.yuco.net/>のyucoさん)で行われ、ここで大まかな連載の流れや取り扱う内容、また執筆者の選定がなされました。

しかし、この時点で、連載すべての回の執筆

者やテーマの詳細が決まったわけではありません。後からプロジェクトのメンバが追加されていくことは目に見えていました。また、すべての執筆者に、スケジュールや原稿要領など定型的なことも共通して伝える必要があり、毎回つまみぐい的にランダムなテーマとは言え、全体を通した雰囲気などを伝える必要もあると考えました。

つまり「後から追加されたメンバからも、プロジェクトの見通しが良いこと」。それを実現するには、メンバのメールでのやりとりのアーカイブ、また、作成されたドキュメントの閲覧が可能なシステムが必要で、これに適したツールとして、以前からWiki界隈で定評があったqwikWebを候補に挙げました<sup>注1</sup>。

注1) qwikWebについては本連載第10回「qwikWeb徹底解説」(2006年5月号)をご覧ください。

図1 連載進行方法

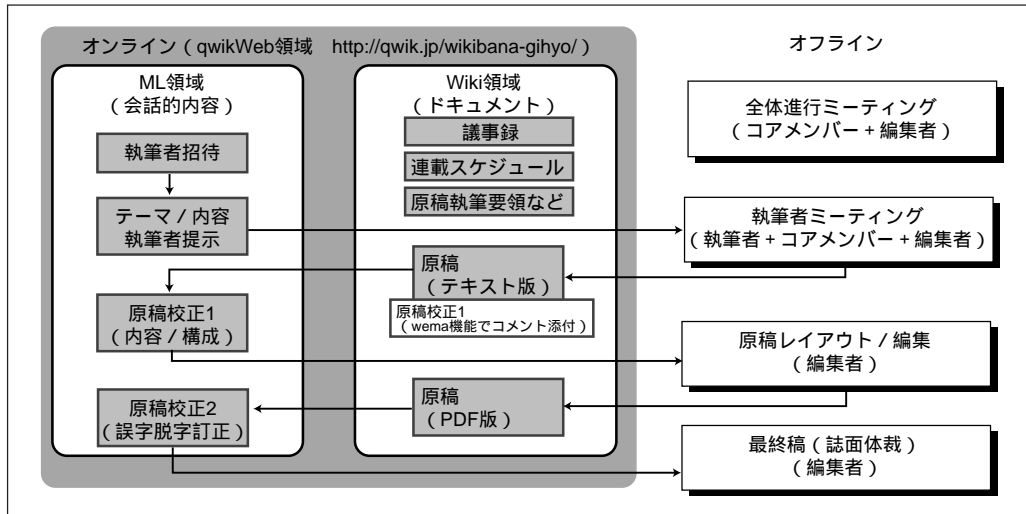


図2 プロジェクト立ち上げのメール

To:wikibana-gihyo@qwik.jp  
 CC:編集長,塚本牧生氏,yucoさんのメールアドレス  
 From:しばむらのメールアドレス  
 Title:qwikWeb新規作成

### qwikWebにプロジェクトを立ち上げる

qwikWebはメーリングリストと登録されたメンバのみが閲覧できるWikiのハイブリッドシステムです。メーリングリストに送信されたメールは、件名がタイトルのWikiページが作成され、サイトにアーカイブされます。また、サイト上では新規にWikiページを作成したり、付箋機能でコメントをつけたり、ファイルをアップロードして添付することも可能です。

第1回のミーティング後、まず、筆者は図2のようなメールをqwikWebに送信し、プロジェクト用のメーリングリストとサイトを立ち上げました(メールを送信すると、システムから応答メールがあり、そのままそのメールを返信すると、はじめてqwikWeb上に1つのメーリングリストとWikiサイトが作成されます)。

### qwikWebにページを作成する

次に行ったのは、議事録、連載スケジュール、原稿要領についてのページ作成でした。これはメールで送信してもページが作成できるのですが、そうはせず、Wikiサイト上で「新規作成」

図3 新規執筆者の登録メール

To:wikibana-gihyo@qwik.jp  
 CC:執筆者のメールアドレス  
 From:しばむらのメールアドレス  
 Title:新規登録

機能を利用して、ページを作成しました。

明文化はしませんでした。新規ページの作成とメールの切り分けは、周知や会話的な内容はメールで、議事録や原稿などドキュメントについては新規ページで、という暗黙の運用ルールができていました。

### qwikWebに執筆者を招待する

qwikWebに執筆者を招待するには図3のようなメールを送信しました。

新しい人を登録する際、「新規登録」という件名を付けるようにしました。同じ件名のメールは、同じタイトルのWikiページに追加されるからです。「はじめまして」や「こんにちは」というタイトルのページが乱立しないようにする工夫の一環です。

### qwikWebに原稿を上げる

原稿は2段階に分けてWikiサイトに掲載されます。

1回目はプレーンなテキストで、内容や構成の確認をするためのもの。新規ページを作成して、



## 最終回

## 第12回 Wikiの未来とWikiの本質

本連載を通じてそのときどきのWikiに関する話題を取り上げてきた「yomoyomoのWikiばなし」ですが、最終回はその拡大版としてこれまでの内容をふまえ、Wikiの現状と未来について論じたいと思います。

## Web 2.0とWiki

近ごろは猫も杓子もという感じで「Web 2.0」という言葉が濫用されており、正直言ってこの言葉には食傷しているのですが、Web関係の技術動向を追う際にこれを避けられないのもたしかです。

ティム・オライリーが論文「Web 2.0：次世代ソフトウェアのデザインパターンとビジネスモデル」(<http://japan.cnet.com/column/web20/story/0,2000055933,20090039,00.htm>)においてWeb 2.0の原則として挙げる「参加のアーキテクチャ」「プラットフォームとしてのウェブ」「集合知の利用」といった言葉はそのままWikiにあてはまるもので、WikiがWeb 2.0の潮流に合致するシステムであることがわかります。

しかしそれ以上に特筆すべきは、Web 2.0という言葉で括られる技術トレンドがWikiに応用されることで、これまでWikiの弱点とみなされていたものが克服されつつある点です。

具体的には、入力インターフェースとしてのWebブラウザの貧弱さはそのままWikiの弱点でもあったわけですが、Ajaxに代表されるJavaScriptを用いたリッチクライアント技術は、WikiのWYSIWYG編集を可能にし、Wiki利用の参入障壁を下げています。その他、Wikiの問題として挙げられる代表的なものに、Wikiエンジンごとに記法が異なるため、システムを乗り換えるたびに記法を覚え直さなければならぬことがあります。WYSIWYG編集にはこの記法の相違を隠蔽する効果もあります。

また、Wikiシステムの多くは、ページがすべてフラットに扱われるため、ページ数が増えるに従いその分類と管理が難しくなることが指摘されてきました。ページに階層構造を適用するWikiエンジンはすでにありますが、決定的な対策にはなっていませんでした。それに対し、一連のソーシャルブックマークサービスに端を発するタグ

システムをWikiに適用することが、ページ分類の問題の有力な対策として浮上しています。

一般的に見て、Web 2.0という言葉で括られる技術が、Wikiにポジティブな効果をもたらしていると考えて良いでしょう。上記のWYSIWYG編集やタグシステムを導入したWikiシステムの最新形の一例として、Wetpaint (<http://wetpaint.com/>)が挙げられます。

## 企業が取り組むWiki

Wikiを巡るこの1年の動向で最も重要なのは、Wikiを採用する企業の増加がもたらせません。たとえば、インターネット商取引企業の代表格であるAmazonがProductWiki (<http://www.amazon.com/gp/wiki/what-is-this/>)でユーザ主導での商品情報の充実を図り、世界最大のコンピュータ企業であるIBMはQEDwiki (<http://japan.zdnet.com/news/devsys/story/0,2000056182,20102722,00.htm>)でエンドユーザによるプログラミングの実現を目指しています。いずれも単なる目新しさだけでなく明確な目的意識を持ってWikiを採用しているのがわかります。

これから企業において、社内向け/社外向けを問わず用途に応じてblogだけでなくWikiも利用する動きが広がるのではないのでしょうか。

企業向けWikiソリューションを提供する企業として、本コラムの第1回(本誌2005年8月号)でJotspot (<http://www.jot.com/>)とSocialtext (<http://www.socialtext.com/>)を紹介しました。前者はコラボレーション用アプリケーション構築プラットフォーム、後者はエンタープライズ向けソーシャルソフトウェアを目指して順調に資金調達、新サービスの提供を行っているように見えます。この2つに加え、よりハイエンド向けのエンタープライズWikiであるConfluence (<http://www.atlassian.jp/software/confluence/>)を開発するAtlassianが企業向けWikiソリューションを提供する代表的企業と言えます。そしてConfluenceが、日本において本格的な企業向けWikiソリューションを提供する最初の企業になりそうです。

### Wikipediaよりも重要なもの

ユーザビリティ専門家として著名なヤコブ・ニールセンが、「Webにまつわる大騒ぎは見当違い」([http://www.usability.gr.jp/alertbox/20060403\\_hype.html](http://www.usability.gr.jp/alertbox/20060403_hype.html))という文章で、企業内で実用本位に利用されるWikiは、オンライン百科事典Wikipediaよりも大きな価値を有しており、我々の働き方を変える可能性があるという興味深い指摘をしています。

一方でニールセンは、WikipediaをハイパーテキストとしてのWebサイトへ立ち戻ることの利点を示すものと評価しており、決してWikipediaを貶めているわけではありません。

ニールセンとは違った意味になりますが、当方もこの1年で、Wikipediaは例外的存在であり、これとWiki一般を分けて考えるべきだと思うようになりました。もちろんWikipediaはWiki最大の成功例ですが、あまりにも巨大化しており、個人であれ企業であれWikiを構築する場合に目標とすべきロールモデルにはならないと感じます。

もはやWikipediaが何らかのニュースにならない週はないと言って良いほどですが、個人的にはWikipediaの項目数やその内容そのものよりも、Wikimedia財団が(現在のように創始者のジミー・ウェルズ1人が目立つのではなく)、編集合戦、記事の中立的な観点、匿名性の問題といった課題に適切な判断を下す集団運営体制を築けるかということに関心があります。

Wikiコミュニティ全体に及ぼす影響としては、Wikipediaで採用され、欧米で最も利用されるWikiエンジンの1つであるフリーソフトウェアMediaWiki(<http://www.mediawiki.org/>)の開発の方向性もWikipediaそのもの以上に重要かもしれません。

### Wikiの未来とWikiの本質

本連載においても2度にわたり記事を執筆されている江渡浩一郎氏が、Wikiの国際シンポジウムWikiSymで見られた対立について重要な投稿をしています(<http://qwik.jp/wiki-study/3.html>)。提示されている論点はいくつかありますが、ここでは最初に書かれている「Wikiの構造をデータベースのように発展させようとする一派と、あくまでもテキスト(文章)に留め

ようとする一派」の話を中心に考えます。

当方はWikiの機能性の一部が既存のアプリケーション(たとえばオフィススイート)に取り込まれていくことを本連載で予想していますが、同じ目的を達するのに逆にWikiのほうを変化させるという方向性も当然考えられます。

Wikiのページ構造、入力形式を固定化すればWiki利用の参入障壁は確実に下がりますし、各ページの内容のフォーカスが定まるという効果もあります。前回紹介したオープンソース情報データベースSwik(<http://swik.net/>)がその一例です。

ここまでくればWikiの構造をデータベースにしようとするまであと一歩です。たしかにWikiのページ内容をかっちり構造化してデータベース処理できるようにすれば処理効率上がる局面は多いでしょう。

しかし、それはWikiの自由度を、利用者による発展の可能性を確実に減じてしまいます。そうした観点からすれば、匿名性の問題を含め江渡氏の主張が一貫しているのがわかります。

ここで筆者が思い出すのは、同じく江渡氏による「WikiはWebと同じ部品からできている」という文章です。この言葉に照らせば、Web 2.0だろうが3.0だろうが、Webというシステムの必然的な発展であれば、それにWikiが入るのはまったく不思議ではないのです。上に書いたようにニールセンが、「ハイパーテキストとしてのWebサイトへ立ち戻ることの利点を示してくれている」とWikipediaを評価するのも同じことだと思います。

そして、それならWikiの本質は何か? そもそもWikiとは何か? という疑問に行きあたります。恥ずかしながら、これが現在も筆者にとって答えるのが難しい質問であることを告白せねばなりません。

Wikiの未来を考える場合、(筆者の文章もそうですが)我々はどうしても機能の増加を重視してしまいます。しかし、江渡氏が書くようにWikiの本質に「機能の欠如」があるのなら、Wiki開発者は、何を加えるかの前に、何を变えないか、さらには何を欠けたままにしておくかを考えるべきなのかもしれません。

Wikiがこれからも誰もが編集できるという参加性、Webページ間を簡単に結び付ける接続性、そして何より多様性を備えた風通しの良いシステムであり続けることを願います。